

## ■晩年における訓練（3/4）

「知恵のある子は父の訓戒に従い、あざける者は叱責を聞かない。……知恵のある子は父を喜ばせ、愚かな者はその母をさげすむ」（箴言 13:1, 15:20）。これとは反対に、私もよく見受けるのであるが、聖職であれ普通の職業であれ、子が父のあとを継ぐのを見る両親の楽しみと喜びは、どんなであろうか。ソロモンはさらにこう付け加えている。「正しい者の父は大いに楽しみ、知恵のある子を生んだ者はその子を喜ぶ。あなたの父と母を喜ばせ、あなたを産んだ母を楽しませよ」（23:24, 25）。

年老いたサムエルにとってもう一つの困難は、新しい時代の要求に順応することである。彼はイスラエルのさばきつかさとして、エリのあとを継いだのであるが、その職務は、ヨシュアの死後神によって制定され、それ以来長く継がれてきたものである（士師 2:16）。国民は長い間、従来 of 政治機構、すなわちさばきつかさを主の代理者として仰ぐ神政政治に満足していた。ところが今、イスラエルは、他の国々のように王を立ててほしいと言い出したのである（1サムエル 8:5）。サムエルはそれを聞いて本能的に、民が自分をのけ者にしようとするばかりか、神をも拒もうとしていることを知った。彼のそうした恐れは、主のみことばによって確証されている。「あなたを退けたのではなく、彼らを治めているこのわたしを退けたのである」（8:7）。

神はご自身の定められたときに、そして定められた人の用意ができたときに、イスラエルのために王を与えようと計画しておられたのではないだろうか（参照申命 17:14, 15）。神のみこころにかなう人とはダビデであったと、私は確信している（1サムエル 13:14、16:7, 12）。サムエルの寿命はダビデが成年に達するまで続いていたのであるから（25:1）、もしイスラエルがあのような性急な態度に出なければ、サウル王の下で苦しむ必要はなかった。サムエルは民の要求に対して、王を立

てることはぜいたくであり、また王というものは民に仕事を強い、みつぎ物を取り立てるものであることを説明し、反対したけれども、むだであった(8:11-18)。「それでもこの民は、サムエルの言うことを聞こうとしなかった。そして言った。『いや。どうしても、私たちの上には王がいなくてはなりません。私たちも、ほかのすべての国民のようになり……。』……主はサムエルに仰せられた。『彼らの言うことを聞き、彼らにひとりの王を立てよ。』」(8:19, 20, 22)。

晩年を迎えた者にとって、次の世代の若者たちがこれまで幾代も守られてきた道を捨て、先人たちがよしと認めた生活信条を拒んで、未踏の道に向かおうとするのを見ることは、暗黒で困難な試練である。人はサムエルのように、熱心に忠告し、涙さえ流して訓戒に努めるであろう(8:11-18, 12:6-17)。彼は昔から伝わる道の効能、この国の歴史を導く神の御手、政治的あるいは宗教的な新しい学説や慣習の危険を彼らに思い起こさせることができる。おそらく彼らは、イスラエルがそうであったように、その勧告に耳を貸さないであろう。しかし彼は、そのために不機嫌になったり、当たり散らしたり、神経過敏になったりする代わりに、次のサムエルのことばのような思いやりと誠実さを持つことができる。「しかし主に従い、わきにそれず、心を尽くして主に仕えなさい。……主は、ご自分の偉大な御名のために、ご自分の民を捨て去らない。主はあえて、あなたがたをご自分の民とされるからだ。私もまた、あなたがたのために祈るのをやめて主に罪を犯すことなど、とてもできない。私はあなたがたに、よい正しい道を教えよう」(12:20, 22, 23)。

祈り、また教える！サムエルのこのことばこそ、私たちが晩年における訓練の最も深いところに導くものである。活発に奉仕のできる時代は過ぎ、目だつ存在であったのに今は引退せざるを得なくなり、多くの人から好意を寄せられていたのに日がたつにつれて人々から忘れられ、多くいた友も少なくなって孤独になり、奉仕は沈黙に変わり、若々しい体力は衰え、有用であったのに、明らかに無用となってしまったとき—そのようなとき、まだそこに新しい形の奉仕の道が残されていることを知るのは大いなる慰めであり、それを経験することは私たちが奮い立たせる。

(次回に続く)

【V・レイモンド・エドマン 人生の訓練 第六章「晩年における訓練」より】  
※この本は図書に置かれています。さらに読みたい方はどうぞご利用下さい